

# 第33期第7回京都市社会教育委員会議の模様を マナビィがレポート！

平成31年3月18日（月）京都市学校歴史博物館で、第33期京都市社会教育委員会議の第7回目となる会議が開かれました。「京都の博物館・美術館等の振興について」を中心とした会議の模様をわたくしマナビィがレポートします！

## ■ 出席委員（17名のうち10名）※五十音順

稲垣 恭子 委員，大八木 淳史 委員，久保川 芳弘 委員，齊藤 修委員，  
佐伯 久子 委員，園部 晋吾 委員，瀧野 早苗 委員，本郷 真紹 委員，  
柁木 良子 委員，吉川 左紀子 委員



## 第33期第7回社会教育委員会議次第

### 開 会

#### 1 議 事

- |                                   |     |
|-----------------------------------|-----|
| (1) 京都の博物館・美術館等の振興について            | 資料1 |
| (2) 平成31年度「政令指定都市社会教育委員連絡協議会」について | 資料2 |

#### 2 報 告

- |                            |     |
|----------------------------|-----|
| (1) 「京（みやこ）まナビミーティング」について  | 資料3 |
| (2) 「京（みやこ）まナビニュースレター」について | 資料4 |
| (3) 平成31年度「教育予算（案）の概要」について | 資料5 |
| (4) 平成31年度「学校教育の重点」について    | 資料6 |

#### 3 主催事業及び刊行物の案内・説明

### 閉 会

## ■ 議 事—1 京都の博物館・美術館等の振興について

配布資料 [京都の博物館・美術館等の振興に向けて](#)

○ 報告者（河合 律子 生涯学習部 課長補佐）



- 京都では、国や自治体、社寺、大学、企業など色々な主体が博物館を運営している。そうした施設を合わせて緩やかなネットワークである京都市内博物館施設連絡協議会（京博連）を設立し、様々な取組を推進している。
- 京博連では、これまでから館長や学芸員が展示物を紹介する「博物館講座」や、加盟館を紹介する

書籍である「京都ミュージアム探訪」を発行している。ミュージアム探訪は概ね5年に1度改定している。まもなく第7版を発売する予定である。加盟館で受付や展示解説・監視などの業務を支援する博物館ふれあいボランティアを養成する「博物館ボランティア養成講座」なども実施している。

- 今年は、国際博物館会議（ICOM）が9月に日本で初めて京都で開催される。大会そのものは博物館の専門家による国際会議だが、開催を記念し京博連と京都市教育委員会では市民や観光客にミュージアムに親しんでいただくため様々なイベントを実施している。
- 2年前の社会教育委員会議でのご意見を踏まえ、夜間開館や博物館を会場としたコンサート、各館や展示品の特色を活かしたスイーツを提供する企画などを実施した。子どもにも博物館を楽しんでもらえるように、ミュージアムキッズの開催や流行のリアル謎解きゲームである「京都謎解きミュージアム巡り」なども実施している。
- 外国人参加者の受入体制の充実に向け、各館を対象とした多言語化対応研修会や、日本語・英語・中国語の3カ国語での対応が可能な「指さし会話シート」を作成、配布している。
- 毎年、特定の日に博物館が無料となる「関西文化の日」は11月に実施されているが、今年は特にICOM 京都大会に合わせて9月にも「関西文化の日+（プラス）」として、京都以外でも2府8県の博物館が無料となる取組を合わせて実施する。
- ICOM 京都大会に向け機運は高まりつつあるが、博物館にはなかなか厳しい現状もある。国からの補助金も無く、その運営は財政的に厳しいことが多い。学芸員についても非正規雇用化が進むとともに、学芸員が1人もいない博物館も多い。規模の大きな博物館に限定しても平均して1館に1人の学芸員がいる程度となっている。
- 文化財の保存管理や調査研究、来館者対応や企画展の開発等の多様な役割は、学芸員が担っている。施設の老朽化や収蔵庫不足もあり文化財の受け皿としての機能としてコレクションを増やしていくことも難しくなっている。
- 博物館の役割として従来から資料の収集・保管・展示・調査研究等が当然に求められているが、加えて、地域の中核拠点や人材育成の拠点、観光資源の発信拠点、経済資源の発信拠点、地方創生の中心拠点としての役割も求められるようになってきている。
- 本市では、今後、京都だけでなく関西・全国の博物館との相互連携や、博物館の発信力の向上、子どもたちへ博物館を通じた学び、市民が日常的に博物館を楽しんで頂くための取組などを進めていきたいと考えている。

#### ○ 本郷 真紹 委員（学校法人立命館理事補佐、立命館大学文学部教授）



立命館大学にも学芸員の養成課程があり、学芸員の非正規雇用化は深刻な問題だと考えています。せっかく資格を取っても就職先が無いのです。このことはあまり認識されておらず、大学でも、大学院の修了者に対して大学への就職のことばかりを考えているのが現状です。例えば大学院問題を議論する委員の中にも、大学院修了者の就職先について「博物館・美術館の学芸員や教育委員会の社会教育主事などの職があるじゃないか」などと不見識なことを平気で言っているような人が含まれる有様です。

やはり、若い学芸員が新しい発想で博物館のコーディネートを考えることがなければなりません。また、情報伝達ツールについてもAIなどの新しい物を駆使した取組などもまだ少ないです。コーディネートや情報発信が定番化してしまっており、残念なことに博物館・美術館自身が魅力の無いものとなってしまっている感が否めないと思っています。

社会は若年層・青年層が博物館に足を運び、直接本物に触れるようになることを目指していますよね。本物に触れる経験を通して、新たな自身の方向性を見出していくことを期待しているのですが、そうであるのならば、発想が豊かな若い世代の学芸員にできるだけ多くの企画を立ててもらおうというのがまず一番重要ではないかと思います。

また、博物館にこういった層を呼び込むことを目標にしているかでも対策は変わってきます。博物館の魅力伝え市外からも足を運んでもらうということと、市民に足を運んでもらうためということでは、その課題は全く別の所にあると思います。市民は情報が無いから足を運ばないのではなく、いつでも気軽に行けるから敢えて行く必要も無いだろうという考えで、灯台下暗しという状況になっている人が多いと思います。

市外の人に京都市の博物館の魅力に触れて欲しいということならば、「京都」と冠を付けたテレビ番組を放送すればいい。今よく話題になっているように「京都」と名前が付くだけで、ドラマからドキュメンタリーに至るまで非常に視聴率が上がります。その一環としてしかるべきコメンテーターが神社仏閣を紹介するのと同じように、番組の中で京都の博物館が持つ魅力に言及してもらえば一挙に集客率は上がると思います。そういう試みも必要だろうと思います。

ただ、市民の方に足を運んでもらうということであれば違います。対市民ということであれば、子どもたちが今何を見ようとしているのか、どういう形でのディスプレイがこれからは望まれるのか等を新しい発想で工夫することが大事なのではないかと思います。

世界的に見ても有名な博物館は、大英博物館のように入場料が無料であったりします。しかし、日本はそういった風土になく、経営的に厳しい所もあると思いますが、素晴らしい物がたくさんありますから、我々も総力を挙げて様々な課題を克服していくことが必要だと思います。

## ○ 稲垣 恭子 委員（京都大学大学院教育学研究科長）



京都にはみるべき博物館・美術館がたくさんあって、すごく支持基盤も多様です。何かと活かす道があると思っています。予算の問題や人材の問題などは簡単に解決できないと思うのですが、学芸員の養成と同時に博物館・美術館で子どもたちへの解説をしてもらうボランティアの養成も必要ではないでしょうか。これは割と海外の美術館などでは目の当たりにすることで、そうした手もあるかなと思います。

海外からの観光客にも京都の特徴ある博物館・美術館を回ってもらいたいと思います。例えば、可能であれば旅行会社とタイアップしてテーマを決めた博物館や美術館を巡るツアーを企画できれば良いなと思います。そうした少しアカデミックな面から京都を楽しむストーリー性のあるツアーがあっても良いなと思います。

京都大学では今年、台湾の学校の先生に対する研修を引き受けることになっています。約10日間の行程の中で、この学校歴史博物館を含めたいくつかの博物館・美術館を回っていただき、京都や日本の教育・文化を理解いただくことを組み込んだ研修にする予定です。そういう様にツアーと研修を重ねるという考え方もあるのではないかと思います。

この研修は、7月に台湾の高校へ留学生をリクルートに行った際に、要望があったことからこの研修プログラムを作りました。高校生を京都に留学生として送り出すには自分たち教員が京都という所を知っておきたい、とのことでした。3つの高校から希望する先生を募り、京都大学教育学科の先生たちがそれぞれレクチャーを行ったり、大学内を案内したり、学校歴史博物館や京都国立博物館、文化庁、他にも少し京都らしい文化的な所にも3日間を充てて回る予定です。堀川高校や洛西高校に訪

問させていただきます、先生同士の交流を図ることも予定しています。

1点お伺いしたいのですが京都市民を対象に、何かのきっかけで博物館等を訪れた人が一回限りで終わってしまうのか、あるいはどういう人がそれを機に他の博物館にも継続して行くようになったり、様々な企画展の情報などに関心を持つようになったりするのかを調査したことはありますか。来館者調査は各館で日常的にやられていると思いますが、そうしたことも調査してみると参考になるのではないかと思います。

#### ○ 本郷 真紹 委員（学校法人立命館理事補佐、立命館大学文学部教授）

稲垣委員の発言からふと思ったのですが、生涯学習の一環として市民の方に博物館に親んでもらう手段の1つとして「博物館検定」というものが考えられると思います。現在実施されている京都検定には非常に魅力があります。京都検定の各級に合格するために、多くの方が出題されそうな所を巡っていますよね。

京都にはこれだけの博物館・美術館がありますから「京都博物館検定」を創り、例えば1級に合格された方を優先的にボランティアとして任用し、博物館で来館者を案内していただくなどするようなことを考えてみてはどうでしょうか。こうした資格化ができるとその一環として、大学の講座なども含め非常に意欲的に取り組む人が多くなると思います。市民の方の評価も得られるのではないかと思います。

#### ○ 報告者（河合 律子 生涯学習推進担当 課長補佐）

ボランティアの養成ですが、平成11年度から教育委員会として実施しています。養成事業の修了者には「虹の会」というボランティア組織を作っていただいています。この虹の会に登録いただいているボランティアには、京博連加盟館のうち約30館程度で現在活動していただいています。

活動内容は様々ですが、受付業務や監視業務、ガイド案内なども行っていただいております。中には英語での案内などもするボランティアもおられます。博物館の中には、虹の会のボランティアがいなければ館の運営が成り立たないとまで言われる博物館もあります。

各館によってボランティアに携わってほしい業務は様々ですので、ボランティアには各館の要望を聞きながらその運営を支えていただいています。虹の会は毎月1回の定例会を行っており、各館からの要望や課題などについて会員同士で情報交換をしています。生涯学習部としてもより良い活動に繋がるように虹の会を支援しているところです。

課題としましては、各館からは要望は様々でありその全てに対応しきれていないことがあります。特に館の望まれる全ての日にボランティアに活動いただくことが難しい状況にあります。

市教委としましては、できる限り博物館でのボランティア活動を希望する方全員が、ボランティア活動に従事できるように支援に努めるとともに、虹の会会員の方が少なくなってきたら養成講座を開催し会員を増やしていくなど、各館運営の支援に努めているところです。

#### ○ 事務局（春田 寛 生涯学習部長）

虹の会の増員が必要だというニーズから直近では2年前に養成講座を実施しております。養成講座は毎年ではなく必要に応じて実施させていただいています。現在はおおよそ260名の方に虹の会会員として登録いただいています。

リピーター調査につきましては、各館でそれぞれ来館者アンケートをされている所もありますが、先ほど稲垣委員からご提言いただいたような形態、リピーター調査を実施し分析を行い、その後の館の運営方針等の参考にするとといった調査は教育委員会としては実施していません。各館でもなかなか



そこまでは出来ていないのが現状かと思えます。そのあたりは京博連の会議もございまして、そうした所で諮り京博連全体として取り組んでみるのも検討していきたいと思えます。

#### ○ 大八木 淳史 委員（ラグビー元日本代表、丸貴管鋼株式会社顧問）



京都市が直営する博物館・美術館というのはどのくらいありますか。先ほど説明があった予算不足の話は、市営の博物館・美術館の運営費が足りないということですか。ミュージアム探訪に記述のある博物館・美術館は全て京博連の加盟館だということだと思いますが、京都市の直営館であれば運営費の不足に対してネーミングライツなどの手法による資金確保などの手があると考えたのですが。

また、このミュージアム探訪ですが、きちんと装丁もされていて良い本だと思うのですが、内容が少し教科書みたいな感を受けます。社会教育や生涯学習に興味のある人であれば大変有益であると思いますが、興味のない人なら冒頭の数ページをめくれば「もう十分だ」と思われるような気がします。

時代とともにPRの仕方も変えていかなければならないと思いますが、現在は情報が多すぎる世の中になっています。公開する情報を制限する方が、かえって情報を欲するようになるのではないかなと思います。今の風潮の中ではSNS・インスタ映えする展示品などには集客力があると思いますので、その展示品だけの情報を出すなどすると広がりやすいのではないのでしょうか。

博物館そのものや収蔵品の歴史的な経緯などの説明情報は、インターネットで調べれば誰にでもすぐに分かる情報です。この展示品が「インスタ映え」する、この時期だけの限定展示、この時間帯が一番きれいに写るといったPRなら多くの人に有益な情報と認識されると思います。

そういった少し斬新と思えるようなものでも、今の風潮を広報の中にも取り入れることも考えるべきではないかと思えます。きちんとした本の形で未来に残して行くことも重要ではありますが、博物館・美術館に興味を持たない人にも知ってもらうにはそうした手法が有効ではないかなと思います。

#### ○ 事務局（春田 寛 生涯学習部長）

京都市の直営による博物館・美術館は京都市美術館をはじめとする約10館です。こうした市営や国立などの博物館・美術館については当然ながらしかるべき予算措置をされています。先ほど説明させていただいた予算不足というものは、多くある民間経営の博物館に関する一般的なものと認識ください。

また、市教委としても残念ながら各館の運営経費について何らかの経済的支援を行う様な取組は行っていません。しかしながら厳しい財政状況のもと十分な予算が確保できているものではありませんが、例えば、生涯学習部では博物館のネットワーク化事業をはじめとするいくつかの事業に取り組んでいます。今年であれば各館の多言語化に対応する研修や各館のWi-fi整備など博物館・美術館の運営を側面から支援するような取組を行っています。

#### ○ 園部 晋吾 委員（NPO 法人日本料理アカデミー地域食育委員会委員長、山ばな平八茶屋若主人）

博物館・美術館の現状について説明を頂いたのですが、非常に難しいなという印象を受けました。予算不足・人材不足は博物館に限った話ではなく、社会の至るところで叫ばれていることであり、どこから資金調達できれば良いのですがそういうわけにもいきません。こうした時には草の根的にやるしかないのではないのでしょうか。興味を持っておられる方に上手く広報できる方法を考えていき、少しずつファンを増やしていく地道な努力が必要なのかなと思っております。



例えば、博物館や美術館に関する協議会やネットワークがあるのであれば、単なる情報の共有化だけではなく、実際的にそれを活かして何か事を起こしていくということが大切ではないでしょうか。例えば、各館単独の努力だけでなく、こうしたネットワークを生かして複数館で何か新しい打ち出しを検討できないでしょうか。また、他業種とのコラボレーションも含め、取りあえずは敷居を下げて来館してもらい、そこからファンを増やしていくことも必要だという気がしています。

これは博物館だけでなく、日本の文化全般がそうした少しずつファンを増やしていくといった取組をすることが大事なのかなと思っています。他業種ではありますが、私自身同じような流れの中に居りますので、和食と他業種とのコラボレーションや協力を進めることで、複合的な興味関心を少しずつでも引けたらなと思っています。とは言いつつも難しい問題であると思っています。

#### ○ 齊藤 修 議長（京都新聞社総合アドバイザー）

私も仕事柄、必要な人に必要な情報を伝えるということの難しさは理解していると思っています。大八木委員が先ほど言われていたSNSの活用など新しい方法も色々あると思いますが、こういった情報をどのように届けるかということはなかなか難しいことです。

それと、色々な他業種と京博連のコラボによってファンを創っていくというのは大事かなと思いました。博物館と食を絡める、例えばこの学校歴史博物館の中で給食が食べられるとかも面白いかなと思います。

#### ○ 大八木 淳史 委員（ラグビー元日本代表、丸貴管鋼株式会社顧問）

京都市のふるさと納税はどのような取組になっているのですか。と言いますのも、今年は日本でラグビーワールドカップがありますが、東大阪市には高校ラグビーの聖地である花園ラグビー場がありワールドカップの会場の一つになっています。ワールドカップの会場になったので、その規模に応じた客席などに改修をしなければなりません。東大阪市はその費用をふるさと納税で調達することにしたのですが、改装費用の2.5倍もの税額が集まったそうです。これは日本の高校ラグビーの良さを世界にも発信したいとのファンの想いと、納税者はグラウンドの中に名前を残せるということが当たったようです。市営の博物館などでも同じような手法が検討できるのではと思ったのですが。

#### ○ 久保川 芳弘 委員（平成29年度京都市PTA連絡協議会会長）



博物館や美術館に行けば色々なことへの気付きや学ぶことがあります。また、実際に身近な人に感じたことなどを伝えていくことができます。自分の子どもにも一緒に行かないかと誘うこともできる。そうしたことは分かっているのですが、私自身、このミュージアム探訪を拝見し、その多くが行ったことのない所や恥ずかしながらPTAなどの研修会の一環で行ったことがある程度でした。この学校歴史博物館もPTAの研修で来たことがあるだけです。

そうした研修会を一つの機会と捉えることもできると思います。PTAだけでなく地域の各種団体の研修会用としても企画されれば参加される地域の方もいると思うので、そうした所に提案されても良いのではないのでしょうか。PTAの役員として活動していると、色々な事業や企画展などのチラシをよくいただくのですが、それだけではなかなか「行ってみようか」ということまでには繋がりません。色々な人が足を運ぶことに繋がる広報媒体や方法

を考えてみるべきだと思います。

今、そうした方法案が私自身にあるものではないのですが、PTAや各種団体は定例的に研修会等を実施していますが、そのプログラムを考えるのに結構頭を悩ませていると思います。そういう所にアプローチや情報を届けられる広報が出来れば、博物館に行かれる市民の裾野がもっと広がっていくのではないかと思います。

#### ○ 齊藤 修 議長（京都新聞社総合アドバイザー）

こうした本を出す前、市教委としてはこういった方法で博物館や美術館の広報支援してきたのですか。今年はICOMを機に色々なイベントをされており、その効果で多くの方が博物館に足を運ぶようになってきたとの報告もありましたが。一度訪れると次にも繋がりやすくなっていると思いますが、ミュージアム探訪の発行や特別なイベント以外で他にはこういった方法で周知活動をしていますか。

#### ○ 報告者（河合 律子 生涯学習推進担当 課長補佐）

ミュージアム探訪は京博連ができた翌年に初版が刊行され今回で7版目になります。約5年前の第6版になってからは全国的にも販売を開始しています。このことで京博連の知名度は全国的に高まっていると感じています。

また、京博連独自のHPを平成23年度に開設しています。ホームページのコンセプトとしては、役所らしくなく親しみやすいイメージのホームページにし、市民の方に博物館に興味を持っていただく機会になるようなものになっています。

他の広報支援としては、従来からの実施している事業であってもJRや私鉄各社などにも協力をお願いし、博物館でない施設で広報力がありそうなところにタイアップで広告を掲載して頂くなどしています。

今は特にICOM京都大会があるからということもありますが、ニュース番組やNHKの番組などでICOM京都大会のイベントやミュージアムロードなどの取組も放送していただいたりしています。現在は、そういった形で広報・発信には力を入れているところです。

ミュージアム探訪の第7版では、日本語版を2万冊、英語版を3千冊発行します。これまでの累計であればもっと多く、第6版でも同様の冊数を発行しています。

#### ○ 吉川 左紀子 委員（京都大学こころの未来研究センター教授）



この「ミュージアム探訪」ですが、エリアごとの博物館・美術館をまとめる形で編集されているようですね。もう少し利用者目線を意識した構成を工夫すると、より利用しやすくなると思いました。

博物館を巡ろうと思ったときに、特定の分野に興味関心がある方は、同じ分野の博物館・美術館を見に行くといった計画を立てると思います。歴史好きなら歴史系の博物館を回る計画を立てるでしょうし、あまり観光スポットになっていない穴場的な博物館や、町家を利用した博物館など個性的な所を中心に回るような計画を立てる人もいると思います。そうした点からみると、今の構成は少し利用しづらい感じがします。

30分で観られる施設と半日かけてゆっくりと観て回るような施設が同じ1ページの紙面で収められていることもあって、その館に行こうと思った人が行動プラン作る際には少し使いにくいかもしれません。たとえば、それぞれの施設の平均的な滞在時間を加えるだけでも利用しやすさが向上します。



歴史や産業、美術品などの様々な分野ごと、収容品の時代ごとや博物館の建築時などに応じた時系列、各館の所要時間や収蔵品数などの規模ごと、京都市の小・中学生の教科プログラム用や他都市からの修学旅行に対応できるような編集方法など、様々な観点での整理があり得ると思います。エリアごとにまとめる編集にも利点があり、全ての観点对応したものを紙媒体のこの一冊で成しえるわけではないのですが、索引部分などで利用者の目線に立った工夫をしたり、あるいは最初のページにこの本の利用方法に関する解説を入れるなどすれば、もっとこの本が活きると思います。そうすることで、利用者がこの本を持ち歩いて、訪問したところをチェックをしながら博物館・美術館を回るといった楽しみも生まれるのではないのでしょうか。

WEB サイトなどは、京都市民の方が利用する場合、観光客の方に利用してもらう場合と、利用者のカテゴリーにあった載せ方を想定して色々な検索ができるように工夫することも可能かと思えます。多様なニーズに合った情報の見せ方を考えることは大事なかなと思えました。

#### ○ 報告者（河合 律子 生涯学習推進担当 課長補佐）

吉川委員からのご指摘ですが、第6版までは分野別に編集していました。しかしながら、分類ごとに整理するにあたっては、歴史系や伝統産業系、伝統文化系など博物館にも色んな種類があるだけでなく、一館で様々な側面を持ち分類しにくい博物館もある等の整理にあたって課題もありました。

また、いくつかの博物館を巡ってもらうには、地理的に近いというのも一つの条件だろうとも考えました。そうしたことから、近い博物館・美術館をまとめる形態で整理することに第7版では挑戦してみました。京都市民であれば分類ごとでの整理でも距離的なこともイメージしやすいと思いますが、他都市の方からすれば分かりにくいと考えました。また、あまり馴染みのない博物館ばかりが並んでしまう分野は、どういった分野なのかもイメージしてもらいにくいとも思われます。こうしたことから第7版ではエリア別を選択してみました。

#### ○ 事務局（春田 寛 生涯学習部長）

約25年前に京博連が設立され、その翌年からミュージアム探訪は発刊してきたわけですが、当時から館の大小に関わらずどの館も1ページに収めるというコンセプトで作成しております。当時は、そのことが大きい館も小さい館も一緒にやっけて行こうという連帯に繋がったと聞いています。

ただ今ご指摘いただきました観光マップのような編集方法はページ数の制約もあり、また、その記載内容につきましても、各館からこうした内容で記載して欲しいとのご要望を尊重した形で作成しております。今後WEBの方も整理してまいりますので可能な範囲ではありますが、吉川委員からいただいたご意見に対応してまいりたいと思います。

#### ○ 榎木 良子 委員（同志社大学日本語・日本文化教育センター嘱託講師）



私はわりと博物館や美術館に行くのですが、京都国立博物館や京都市美術館、京都国立近代美術館などの大きな所であったりはするのですが、平日の昼間などすいているかなと思われる時間帯も案外混んでいたりします。博物館や美術館は朝9時から夕方4時半までの所が多く、土日は混むので平日に思うわけですが、当然働いている方は行きにくい時間帯でもあります。そうした方が行こうと思うとやはり週末に集中することになりますが、週末は観光客も多くゆっくりと観て回ることはできません。

京都国立博物館では金曜日と土曜日に夜8時まで開館していますので、以



前レプラント展に行ったのですが、その時はすいていてゆっくりと観ることが出来ました。もう少し平日の夜間開館を他の博物館でもしていただければ少し静かに見られるのかなと思います。

例えば、規模や集客力が違うので同じことができるものではないと思いますが、海外のルーブル美術館などは夜9時半まで開館していたりします。夜間開館などの工夫は多くの方が博物館に行きやすくなると思います。

また、六本木の森美術館が2年前にやっていた村上隆氏の「五百羅漢図展」に行った時のことですが、来館者がスマートフォンで展示品の写真を撮影していました。係の人にいいのですかと聞くと、どんどん宣伝をしてもらえるので構いません、と言っていました。今時、博物館や美術館の専門雑誌を見て来る人は減っているようで、来館者が撮影した写真をSNSなどで発信してもらおう方が集客に繋がるというお話で、宣伝・広報を上手に来館者にしてもらおうということ言われていました。

他にも海外ですと、メトロポリタン美術館などでは館内でのスケッチが許可されています。油彩や水彩の絵の具を使用することは禁止ですが、鉛筆でのデッサンはいくらしても良いという感覚が一般的にあります。美大生や子どもたちが本物の作品に触れる機会が多く、自分の目を肥やしていく学ぶ機会を作っています。この点、日本では割とこうした場所は静かに観るものということが習慣になっていますが、先ほどご説明のあったナイトミュージアムの企画などは子どもたちのための体験型の企画だと思われるので、地道に続けられていけばいいのかなと思いました。

#### ○ 齊藤 修 議長（京都新聞社総合アドバイザー）

私も東京上野にある西洋美術館に行ったとき、来館者が写真を撮影してSNSで発信しているのにびっくりした覚えがあります。職員の方に大丈夫なのと聞きましたら、やはり問題ないとのことでした。しかしながら、まだまだ日本ではそうした所は少ないですね。日本の場合は館の職員が言わなくても、同じ来館者がダメですよと指摘されていたりしますよね。博物館や美術館の夜間開館や開館時間の延長とかはどうなのでしょう。

#### ○ 報告者（河合 律子 生涯学習推進担当 課長補佐）

国立の博物館は金曜日・土曜日は夜間開館することが日本政府の方針としてあり、何とかこれを根付かせようと取り組んでおられるところです。ただ、日本では夜に博物館等に行くという習慣に乏しくあまり来館者は多くないようです。

写真の撮影については少しずつ意識が変化してきており、日本画は熱に弱い特性がありフラッシュ撮影が望ましくないことから撮影は認められ難いのですが、フラッシュによる損傷の恐れのない作品についてはそうしたことを開放しても良いのではないかと、学芸員さんの間でも意見として出ているようです。

また、確かに日本の博物館・美術館には騒いではいけないというイメージがありますが、子ども連れの来館者に限定したツアーを企画されるなど、できるだけ博物館・美術館を楽しんで親んでもらいたいと取り組む博物館もあります。しかしながら、特別にツアーを組まなければ普段はやはり静謐に過ごすものとの意識が根付いているのも確かです。ただ、徐々にそういうことを無くそうとする変化はどこの博物館からも感じられるようになってきています。

#### ○ 佐伯 久子（京都市地域女性連合会会長）

今後の博物館に求められる役割ということで、京都市が推進している取組に「小学生などに博物館を通じた学びの広がり」との記述がありますが、これは小学生だけでなく中学生や高校生にも広げて考えるべきではないでしょうか。



高校生と中学生になるお孫さんがいる方から伺ったのですが、お孫さんがオペラを見に行ったけれども、感想を聞くと何も分からなかったとのことだったそうです。いきなりそうした物を見ても分からないのは当たり前だと思うのです。学校にとってはカリキュラムが大変だとは思いますが、もう少し発達別に簡単な物から触れられるように取り組んでもらえれば良いなと思います。

また、月桂冠の大倉記念館へ女性会の研修で行って来ましたが、近くの昼食をとったお店も含めて観光客で大変混みあっていました。海外からの方も多く、市民にとっては人気のある博物館・美術館は気軽に行く場所というには程遠い気がします。市民にとって市内の博物館や美術館が近場で手軽に行けるような場所となるような工夫も欲しいなと思います。

集客の課題については、子どもを呼び込めればそこには必ず親もついてくるわけですので、子どもが行きたくなるような工夫や、親子限定の取組なども年に数回でも良いのでやってもらえれば良いのではないかと考えました。

### ○ 瀧野 早苗 委員（市民公募委員）



今回のテーマが博物館ということでしたので、ミュージアム探訪の第6版を見てきました。以前にもどこかに行こうかなと思った時に開いてみたことがあります。その度に京都にはこんなにたくさんの博物館や美術館があって凄いなと感心をしていました。それと同時に思うのが市民の方はこうした所によく行かれるのかなという疑問です。今、私は芸術センターでボランティアをしています。同じボランティアさんに聞いてみると「興味のある企画展には行くことはあるけど、普段は行かないよ」との答えが多かったです。多分この方はこの本を持っていないのだろうな、もしかしたら情報量も私とたいして変わらないか私の方がもう少し詳しく知っているかもしれないなと思いました。それってとても残念なことだと思うんです。

ICOM京都大会のことを市民の方に周知するために、様々なイベントを開催されていますが、こうした限定的な期間の取組であっても市民に関心を持っていただくというのはとても大切なことだと思います。特に「京都謎解きミュージアム巡り」は若い方が参加されているようで、芸術センターにも何人かで訪ねてこられ「今、謎解きに参加しているんです」と館内を探し回られていました。この方たちはこの一回だけしか来られないかもしれませんが、やはりそこに行ったということが何かの時に思い出され、また訪ねてこられるきっかけになるかもしれないなとも思いました。

また限定的なイベントとは別に、私が個人的に欲しいなと思うのは先ほどから話に出ていますが、街歩きと融合させた博物館巡りのモデルコースの情報です。いくつかの博物館・美術館を巡って入館料もそんなに高額にならないようなコースを考えていただければうれしいです。

同じようなテーマに沿って回るコースや、収藏品だけじゃなくて建物自体、町家だったり近代の洋風建築であったりと、建物自体を見て回るコースもあると思います。またテレビでやっている途中下車の旅のように、例えば市バス201系統に乗って博物館を巡るというのも楽しそうです。

それに京都はまちじゅうが博物館なので、石碑や文化財の情報も盛り込んだ様々なモデルコースをホームページや市民しんぶんなどで定期的に発信すれば、もっと気軽に博物館や美術館を楽しむ人が増えるのではないかと思います。

それから、公民館押しの私としては、無理かもしれませんが「博物館の歴史や法律的なことを学び

ながらモデルコースを考えてみる」といった社会教育講座もあつたらいいなと考えたりします。講座が難しくてもボランティアの皆さんと一緒にそういうことをする事業があれば、ボランティアの方にももっとやりがいを感じていただけるのではないかと思います。受付業務や監視業務などだけでのボランティアさんの活用とは違って、もっとボランティアさんに意欲的に博物館・美術館のことを考えて取り組んでいただけるんじゃないかなと思いました。

#### ○ 本郷 真紹 委員（学校法人立命館理事補佐、立命館大学文学部教授）

博物館と言っても総花的に考えるのではなく、それぞれに特性がありますのでどの世代のどういう層に何を伝えたいかということを確認したうえで、解説時間や解説内容など集客をどうするのかの問題を考える必要があるのではないかと思います。

夜間開館も確かに大事で、そうすることによって一人でも多くの観衆を見つけるという目的もあるのだと思います。しかしそれだけでなく、本当に真剣に展示品と向かい合うにはじっくりと時間をかけて見る必要があるので、やはり夕方でないといけないということもあると思います。我々も研究の環境で毎年行われている正倉院展などには必ず行きますが、必ず夕方6時を過ぎてからです。それ以前でしたら団体客で混みあっており研究どころではありません。

子どもたちに本物を見せるということも結構ですが、そうした取組をされている学校の先生はなぜか必ずワークブックみたいなものを子どもたちに配り、子どもたちはその課題に真剣に取り組み館内を走り回っています。子どもたちに何を調べさせているのか見てみると、あの鏡の中に蝶々は何匹書かれていますか、とかね。一般の真剣に見に来ている人からすればちょっと迷惑な話です。

ですから、私たちが行くのは団体客や子どもたちが退館した夕方を狙うのです。よく分からないのは、奈良国立博物館は夕方5時を過ぎると料金が安くなるんですね。私は倍の料金であってもいいとさえ思っているんです。本当に見たい人はその時間帯に来ますから。一概に言えることではないんですけども、どういう層に何を伝えたいのかを、それぞれの博物館の性格に照らし合わせてご検討いただいた方がいいのではないかと思います。

#### ○ 齊藤 修 議長（京都新聞社総合アドバイザー）



多くの意見が出ました。私からも提案があります。京博連には220館もの施設が加盟しているとのことですが、一方で、京都のまちには博物館や美術館という施設に収容されない美術品、貴重品も多いですね。

その典型が祇園祭の山鉾で、「動く美術品」などと言われます。鉾町が祭りの期間中に町内自慢の文化財を展示したりもします。祇園祭に限らず、そうしたものは、京都の各地域の祭礼でもあると思います。そうした「施設に入らない美術品や貴重品」について、アーカイブ化で体系的に整理をして、祭りの時に限らず、常時、観ることができるようにしてはどうでしょうか。京博連の「施設に入らない美術品・貴重品」バージョンのようなものですね。そして、京博

連加盟の「施設」のネットワークと、「施設に入らない美術品・貴重品」のネットワークの二つを合わせたものを一堂に観ることができる、言うなら「京都歴史文化情報館」のようなものを造ってはどうでしょうか。本日のテーマは「市民にいかに博物館を楽しんでもらうか」ですが、京都の場合、当然、海外からの入浴客も視野に入ってきます。「情報館」を訪れば、いろんなモデルコースが提供され、それを参考にまちへ出る。世界文化自由都市を宣言した都市であれば、こうした施設があつて



もいいのではないか。この学校歴史博物館のように学校跡地を活用してつくられてはどうか、とも思います。

博物館・美術館は常設展と企画展があって、みなさんの議論の中で出てきたスミソニアンもグループも常設展で人が集まっています。京都や日本の博物館・美術館は逆で、集客の主力は企画展です。海外を参考にするのであれば、常設展で人が集まるような仕掛けが必要ではないでしょうか。京都に来たらまずそこを訪れる、というような施設ということになりますが、今更、収蔵品を集めるわけにもいきません。ただ、京都はまちそのものが博物館・美術館とも言えますから、そうした点からも「京都歴史文化情報館」はいいのではないかと思います。

私は京都で生まれ育ったのですが、未だに、町を歩いていて新しい発見があり、新たな歴史文化に出会います。京都のまち全体が「生きている博物館・美術館」といえるわけですから、京都のまちづくりそのものも、そうした観点からも考える必要がある。そうした視点をもった都市計画をお願いしたいと思っています。

## ■ 議 事－２ 平成31年度「指定都市社会教育委員連絡協議会」の出席者について

配布資料 [平成31年度指定都市社会教育委員連絡協議会（名古屋市）開催概要](#)

### ○ 事務局から（吉川 生涯学習推進課長）

- ・当協議会は、指定都市の社会教育委員が集まり、協議や情報交換を行う場として開催されている。
- ・次年度は7月5日に名古屋市で開催されるが、第34期社会教育委員へと改選されたばかりの時期となる。
- ・近日中に出席者を回答しなければならないため、後日、改選状況を見ながら、議長と相談のうえ対応させていただきたい。

## ■ 報 告－１ 「京まなびミーティング」について

配布資料 [「京\(みやこ\)まなびミーティング」について](#)

### ○ 事務局から（吉川 生涯学習推進課長）

- ・社会教育委員による「京まなびミーティング」ですが、醍醐中央図書館「醍醐味講座」とタイアップし齊藤議長に、『伝えること』と『伝わること』～大災害時代がやってきた～と題してご講演いただいた。
- ・今後は、本郷委員、大八木委員、安成委員、吉川委員、片山委員に、ご講演等いただく予定。

### ○ 齊藤 修 議長（京都新聞社総合アドバイザー）

皆さんご記憶の通り、去年は地震・集中豪雨・台風と本当に異常だと思うほど自然災害が多かったですね。特に犠牲者の多かった西日本豪雨の時、「正常性バイアス」という言葉を知りました。災害情報を知っている。身近に危険が迫っているにもかかわらず自分だけは大丈夫、とってしまっていて避難行動をとらない。その結果、犠牲者を生むということが起こっているといこうことです。実は2万人近い犠牲者を出した東日本大震災でも、多くの方が避難情報を出ていることを知っていながら、やはり避難行動をとらなかったことで多くの被害を生んだということが分かっています。

ということで、東日本大震災から8年という時でしたので、「報道機関が命を守るための災害情報が本当の意味で伝わるというのはどういうことなのか」についてお話をさせていただきました。本日の会場となっているこの教室と同じぐらいの広さの会場でしたので、膝を突き合わせて話せたという感じでしたので参加者の皆さんと一緒に考えることができたのではないかと、そんな気がしました。いい経験をさせていただきました。ありがとうございました。

## ■ 報 告-2 「京まなびいニュースレター」について

配布資料 [京まなびいニュースレター第21号](#)

### ○ 事務局から（吉川 生涯学習推進課長）

- ・今回は榎木委員に「前を向くと景色が変わる」と題してご執筆いただいた。
- ・着物姿を美しく見せるポイントもご紹介いただいている。

### ○ 榎木 良子 委員（同志社大学日本語・日本文化教育センター嘱託講師）

自己紹介がてらライフワークについて書かせていただきました。

ちょうど同じ紙面で織成館さんが紹介されているのですが、12月5日に大学生たちと一緒に見学に伺ったところでした。織成館さんがある西陣の街並みは石畳で風情もありますし、団体であれば割引もあります。また、伝統工芸士さんが実際に帯や装束などを折られている現場を丁寧に説明してくださいます。予約をしておけば、機織り体験をすることもできます。

こうした実際にまちに馴染んだ物づくりを見学・体験できるところが、和装産業だけでも友禅など他にも京都にはたくさんあります。観光客だけでなく地元の人でも訪れたことがある方はまだまだ少ないと思います。

私が行っていた時には海外からの観光客がたくさん来られていましたが、大きなミュージアムも良いのですが、こうした専門的な所でしっかりと地元のことや産業のことを学ぶことも、佐伯副議長が仰っておられたように京都の良さでもあるのかなと思います。

## ■ 報 告-3 平成31年度「教育予算（案）の概要」について

配布資料 [平成31年度「教育予算（案）の概要」](#)

[平成31年度「教育予算（案）の事業概要」](#)

[平成31年度 社会教育関係団体への補助金予算](#)

### ○ 事務局から（吉川 生涯学習推進課長）

- ・平成31年度京都市予算は、厳しい財政状況のもとではあるが、京都市基本計画に基づく施策に重点配分されており、教育予算は1093億円でほぼ今年度並みが確保されている。
- ・社会教育関係団体への補助金予算だが、社会教育法第13条において、「地方公共団体が社会教育関係団体に対し補助金を交付する場合には、社会教育委員の意見を聴くこととされている。

### ○ 齊藤 修 議長（京都新聞社総合アドバイザー）

来年度予算の社会教育関係団体への補助金予算では、京博連には約1,700万円の予算が付けられていますね。昨年は720万。随分と増えていきますねが、これは次年度のみの措置ですか。

### ○ 事務局（河合 律子 生涯学習部 課長補佐）

平成31年度予算は大幅な予算増を認めていただいた。内容としては、大河ドラマ「いだてん」の主人公のお二人をお招きし、スポーツイベントともコラボして今年の6月30日に対談イベントを実施するのを皮切りに、8月24日には「超異次元鼎談」として楽吉左衛門氏を交えた鼎談を実施します。また、ICOM京都大会のソーシャルイベントとしまして、大会参加者を対象とした夜のイベントを二条城で実施します。

この3事業に係る分の費用を積み上げた分の金額となっています。大きな予算を要するものですから、京都市単独でもこうして予算を組んでいます。この予算増は平成31年度限りのものであり、来年度以降の京博連への補助金額はどうか未定です。

## ■ 報 告—4 平成31年度「学校教育の重点」について

配布資料

### ○ 事務局から（菅野 学校指導課 担当課長）

- ・平成31年度の「学校教育の重点」については、学校教育における目指す子ども像として「次代と自己の未来を創造する子ども」としている。色んな人と協働しながら新しい社会を創っていこうという思いを込めている。
- ・今回、改めて国レベル、京都市全体で話題となっている「Society5.0 に向けた人材育成」や「持続可能な開発目標（SDGs）」、「レジリエント・シティ京都の実現に向けた取組と学校教育について」といったこともコラム的な形態で掲載。教職員も国の動向や、京都市全体で進める政策についてしっかりと認識していただき学校教育を進めて欲しいとの考え。ただ、何か新しいことを始めるというものではなく、今の学校での取組が同じ方向性にあることを説明している。

## ■ 主催事業 及び 刊行物等の案内・説明

### ○ 事務局から（下山 学校地域協働推進課長）

- ・第5回会議にて議論いただいた第4次京都市子ども読書計画について、パブリックコメントを経て完成した。
- ・パブリックコメントでは市図書館の整備・充実などをはじめ多くの意見を頂いた。また、学校でも子どもたちへ読書の大切さを伝える取組の充実なども多くの意見があった。
- ・不読率の改善や図書館利用登録率、小学校への司書教諭の配置についても数値目標化している。第4次計画をもとに子どもたちの読書活動の推進に取り組んでいく。

### ○ 事務局から（齊藤 施設運営課長）

- ・アスニー文化祭を16日から2日間かけて実施。日頃から京都アスニーで生涯学習を实践されている講座受講生や自主的に活動されている市民の発表の場である。今年も約5000千人の来場者があった。
- ・図書館でも4月23日の子ども読書の日を中心に、4月を読書月間として各図書館で絵本の読み聞かせや堀川音楽高校と連携した絵本コンサートを開催する。
- ・先ほど報告のあった子どもの読書活動推進計画の取組について、市立図書館としてもその推進を支援していく。

### ○ 事務局から（中芝 はぐくみ文化創造発信課長）

- ・京都のはぐくみ憲章の理念に基づき特色ある取組を進める団体を、憲章実践推進者として毎年表彰。
- ・本年も2月5日のはぐくみ憲章の日に35団体を表彰した。表彰者の取組を配布資料のリーフレットに記載しており、優れた取組を紹介し実践の輪を広げていきたい。

## ■ 閉会 [齊藤議長]

## ■ 閉会挨拶[春田生涯学習部長]